

顔面制動

岡本祥一 予科5-7
(川口市) 航空16-4



スキー場での話ではない。自宅前の車道での話である。

スーパーからの買い物左手にぶらさげていた。1車線、幅約4mの車道を横切ろうとして、歩道と車道との仕切りの縁石に足を掛けた。高さ25cmくらいであろうか。車の往来に気を取られて、左足が縁石に引っかかった。

アッと思い、立ち直ろうとした瞬間は覚えている。しかし体は車道に投げ出されてしまった。頭から落ちた。しかしその前に右ひざと右腕が先に落ちて横転した形となり（柔道の受け身がきいたか）、顔面の衝撃は小さかった。しかし右目の上に「たんこぶ」と大きな痣。気がつくと目の前に車の車輪が大きく見えた。どの位の間に倒れていたのか。近くにいた子ずれの若い夫人が、「大丈夫ですか」と心配して声を掛けてくれた。あわてて起き上がり、びっこを引きながら目の前の玄関に駆け込んだ。本当に恥ずかしかった。顔面の痣が気になり、しばらくは部屋に引きこもったきりであった。右ひざの擦り傷、回復に10日以上かかった。傷の回復が遅くなることを実感した。

歳をとると僅かなところで転んでけがをする。よく聞く話である。今までは他人事として聞いていた。その話がわが身に起こるとは。「他山の石…」、「転ばぬ先の杖」、自戒することしきりである。他人事ではない。諸兄も転ばないよう、足元に大いに気を付けていただきたい。